特集 1

千葉県立美術館「ひらく、めくる、めぐる ―印刷博物館の美しい印刷」協力報告

6月27日から9月6日まで千葉県立美術館主催で開催していた本企画展に、当館が所蔵する貴重なコレクションを提供しました。提供した資料は117点で、西洋と日本で文化が育まれてくるなかで生み出されてきた貴重な印刷物を一堂に楽しんでいただける展示でした。これだけの点数を一挙に公開したのは初めてとなります。展示内容についてご紹介します。



1

西洋の印刷――知のひろがり、美の極み

15世紀半ばにヨハネス・グーテンベルクによって生み出された活版印刷。約半世紀でヨーロッパ中に伝播し発達していきました。各地に印刷所が開設され、ヨーロッパの社会に大きな変革をもたらすことになりました。印刷技術の普及は、宗教改革を加速させるなど、歴史の流れを大きく変えました。これまでは一部の支配階級のためのものであった書物が、印刷本の登場により、書物に触れることが難しかった層に知識や情報が普及していくことになりました。16世紀以降印刷本の需要が高まっていくなかで、宗教や科学、政治、歴史などさまざまな分野の書物が生み出されたのです。宗教や学問の世界を多くの人々と分かち合うためのメディアとして、印刷が果たした役割に注目し、(1)宗教の印刷本、(2)学問の印刷本、(3)芸術としての印刷本、にわけてご紹介しました。

　現在、当館ではインキュナブラを8点所蔵していますが、そのうちプリニウス『博物誌』、『ニュルンベルク年代記』といった4点をご覧いただきました。インキュナブラは、ラテン語で「ゆりかご」を意味します。15世紀のヨーロッパでつくられた活字印刷本で、ヨーロッパ初期印刷史で欠かせない書物群になります。また、精緻な図版印刷を可能とした銅版印刷を挿絵に用いた書物や、世界三大美書を生み出したイギリスの印刷所「ケルムスコット・プレス」「アシェンデン・プレス」「ダヴズ・プレス」の3つのプレスから2点ずつ、かつ世界三大美書のうち『チョーサー著作集』『ダンテ著作集』を展示しました。各プレスの書物には各々が追い求めた美しさが表れています。その他にも活字書体・タイポグラフィの歴史を語るうえで重要な書物を紹介しました。



2

　本や、時代のニーズをとらえた数多くの実用書が刊行され、さまざまなジャンルの印刷物が広く流通するようになりました。また、多色摺木版画の彫りと摺りの技は紙面に彩りを与え、人びとの心を引きつけました。さらに、幕末、明治期には西洋式印刷術の導入により、印刷技術が大きく飛躍しました。この章では「百万塔陀羅尼」、「嵯峨本」を中心とした古活字版、「黄表紙」『南総里見八犬伝』といった日本における文学や印刷物の歴史を語る上で欠かせない、代表的な印刷物を紹介しました。

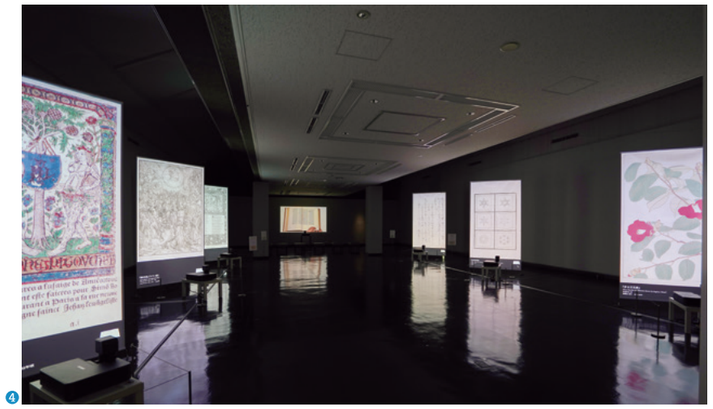


3

デザインと印刷――広がる視覚、新しい形

　当館のコレクションを「デザイン」という視点からとらえ直しました。19世紀以降、科学技術が進展するとより効率的な大量印刷が可能となりました。図版印刷では石版印刷という、水と油分が反発する性質を利用した平版の印刷技法が発明されました。発明者はアロイス・セネフェルダーで、当時は版材に石灰石を利用していましたが、時代が経つと版材も亜鉛やアルミニウムなどに変化していきました。それまでは木版やエングレービングやエッチングなど熟練した彫刻や腐食の技術を必要としましたが、石版印刷は版材に直接線や濃淡を描いて印刷することが可能になり、表現の幅が拡大しました。絵画制作が盛んなフランスを中心に発展し、繊細で美しいポスターが生み出されていきました。そして西洋や日本で、色彩が豊かでデザイン性に優れたポスターが数多く登場することになります。

　ミュシャやカッピエロのポスター、モダンデザインの先駆者のひとりとして評価される杉浦非水（すぎうらひすい）が手掛けた図案作品をはじめ、その他にも地図やちりめん本を含んだ書物など多彩なデザインの魅力を楽しめる印刷物を展示しました。千葉県立美術館での開催にあたって千葉にゆかりのある日本洋画家の浅井忠（あさいちゅう）が手掛けた暦や、伊能忠敬（いのうただたか）の「大日本沿海輿地全図」の小図をもとにしてつくられた「官板実測日本地図」なども展示しました。



4

日本の印刷――文学の世界、技の粋

　日本の印刷文化は、「百万塔陀羅尼」の登場から始まり、その後長い間寺院を中心に印刷が行われました。江戸時代に入り戦乱のない時代が訪れると、文化が成長する土台が築かれ、江戸時代に民間での印刷・出版が花開きました。

　日本は16世紀末に、ほぼ同時期に西洋と東洋両方の活版印刷の技術が伝わるという特徴がありました。寛永期までの約50年間に「古活字版」といわれる活版印刷による出版活動が、ひとときのムーブメントとなりました。これには寺院や為政者、富裕層らが携わりました。なかでも嵯峨本は『伊勢物語』などの日本の古典文学を扱い、近世文学隆盛のきっかけになりました。料紙や装丁に豪華な意匠が施され、行書体・草書体を表現するために、単字の活字だけでなく、複数字合わせた連綿体活字も制作され、使用されました。

　京都で商業としての印刷・出版が始まると、次第に多様なジャンルが生まれました。江戸の街が成長し、庶民文化の成熟に伴って戯作

体験型展示 デジタルインスタレーション「ページの中を歩く」

　印刷技術の美しさをより間近に体感いただけるようにデジタルインスタレーションの展示エリアが設けられました。各章の中から代表的な資料を6点選び、さらにその資料の中から選りすぐりの場面をセレクトしています。

　来場者の方々が自由に歩きながら作品の世界に浸ることができる、体験型の展示です。大型のスクリーンに作品の細やかさや色づかいが迫力満点に浮かび上がり、まるで本の世界をめぐるかように、作品がもつ息づかいを感じていただけたのではないでしょうか。

（印刷博物館　学芸員　宇田川龍馬）

●展覧会実施概要

「ひらく、めくる、めぐる
―印刷博物館の美しい印刷」
主　　催：千葉県立美術館
企画協力：TOPPAN株式会社
会　　期：2026年6月27日（土）～9月6日（日）
会　　場：千葉県立美術館

1 第1展示室
2 第2展示室
3 第8展示室
4 第3展示室